

## 第 24 回高知市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和 8 年 1 月 20 日 (火)  
開会：午後 2 時 00 分 閉会：午後 3 時 30 分
- 2 開催場所 オーテピア高知図書館 4 階ホール
- 3 出席者
- (構成員)
- |              |        |
|--------------|--------|
| 高知市長         | 桑名 龍吾  |
| 高知市教育委員会 教育長 | 永野 隆史  |
| 委 員          | 谷 智子   |
| 委 員          | 西森 やよい |
| 委 員          | 関 博之   |
| 委 員          | 森田 美佐  |
- (市長事務部局)
- |           |        |
|-----------|--------|
| 副市長       | 神谷 美来  |
| 副市長       | 弘瀬 優   |
| 政策企画部長    | 林 充    |
| 政策企画部副部長  | 山本 晋平  |
| 政策企画部副部長  | 甫喜本 博貴 |
| 政策企画課課長補佐 | 平峯 真理  |
| 政策企画課主査補  | 谷村 将生  |
- (教育委員会事務局)
- |              |        |
|--------------|--------|
| 教育次長         | 竹内 清貴  |
| 教育次長         | 植田 浩二  |
| 教育政策課長       | 岸田 正法  |
| 教育政策課課長補佐    | 田中 茂夫  |
| 教育政策課総務担当係長  | 池上 弘倫  |
| 教育政策課主査      | 四國 真衣  |
| 学校教育課長       | 田邊 裕貴  |
| 学校教育課副参事     | 入江 洋   |
| 学校教育課学力向上指導監 | 森田 やよい |
| 学校教育課教育企画監   | 宮田 純子  |
| 学校教育課指導主幹    | 林保 ひとみ |

#### 4 議 題 (1) 学力向上対策

(2) 「業務量管理・健康確保措置実施計画」の作成状況について

##### 【報告事項】

「小学校における水泳授業の安全管理マニュアル」の改訂について

#### 5 議事の経過

##### ● 学力向上対策について資料に沿って説明

##### ● 議論

##### (谷委員)

良いと思う取組が2点ある。

一つ目に評価している取組は、生徒会が主体となって推進する「学習習慣確立」の取組である。中学生は教師よりも生徒の言葉や行動が響きやすい場合があり、仲間の励む姿に刺激されて自ら努力しようとする気持ちになるため、このような生徒主体の取組は有効であり、さらに広がることが望ましい。なお、本取組を導入している学校数を示されたい。

二つ目は、令和8年度における高知市学力向上推進室の取組のうち「ことばの力」の育成である。「ことばの力」は文章読解や表現、傾聴、発信など、すべての教科の学力向上に直結する重要な領域であり、重点的に取り組むべきである。とりわけ読書活動の充実は従前より推進されており、日々継続することによって読書意欲や感受性を高める優れた取組であると評価する。

そこで、まず「ことばの力」を高めるために発信される教材とは具体的にどのような内容であるのか、次に読書活動の充実に当たって連携を想定している関係機関とはどのようなところかについても併せて教示されたい。

##### (学校教育課 森田学力向上指導監)

生徒会主体の取組についてご意見をいただき感謝する。現在、デジタルドリルを活用した活動が急速に広がっており、ほぼ全校で活用率が上昇している。中学校では自主的な活動が進展しており、19校中、3分の1以上の学校で生徒が主体となった取組が行われている。校長会においても当該事例や発信方法を共有し、各校での実践を後押ししている。

また、「ことばの力」は重要な課題と認識しているため、教材として使用可能な「ことばの力」シートを作成し、読む・書く力をスモールステップで高めるとともに、読書の記録や蓄積が可能な読書シートも準備中である。さらに、オーテピアや地域図書館など関係機関と連携し、学校内外で表現の場を設けることで、子供たちが身に付けた言葉の力を実感し、自信を持って社会に臨めるよう推進している。

### (谷委員)

3分の1以上の学校が取り組んでいると聞き、とても嬉しく思った。

「ことばの力」を高めるためには、シートを作成することも大切であり、デジタル教材も重要である。しかし、小学校低学年では本そのものの現物に触れることが特に重要であると考えるので、ぜひそちらも取り入れていただきたい。

非常に意欲的な回答であったので、大いに期待する。

### (西森委員)

学力向上に特効薬はなく、様々な施策を丁寧に行っていくことが重要である。今回の取組のように、生徒会が学習習慣づくりに関わるなど、生徒自身が当事者となって取り組む仕組みは特に有効である。教師だけが頑張るのではなく当事者意識を持たせることが継続につながるからである。

学びの流れを単純化すると「インプット→思考→アウトプット」である。インプットで良質な情報を取り入れ、その後思考して取捨選択と深掘りを行い、アウトプットで自分の考えを伝えたり他者から評価を受けたりする。アウトプットは大きく二つに分けられる。一つは日常や仕事で必要な「相手に伝える表現力」であり、もう一つは試験など外部評価に応えるアウトプットである。後者はドリル等で鍛えやすい一方、評価に強いだけで思考の深さやコミュニケーション力が不足することがある。

AIが発展する現在、様々な媒体から情報がインプットされるため、自ら考える「思考力」と情報の良し悪しを見抜く「データ選別力」がますます重要である。教科書は良質な情報だけが厳選されており、学校教育はその点で有益であるが、意識的に訓練しなければ社会に出てから悪質な情報に惑わされる危険がある。したがって、学校ではインプットの質を意識させる指導と、情報の取捨選択を教える仕組みが必要である。

最後に「ことばの力」について述べる。的確な添削は表現力を飛躍的に高める。ほんの一語や一表現の変更で伝わり方が変わる経験は学習効果が高く、添削ができる人に触れる機会を増やすことが重要である。

そこで、「ことばの力」シートの添削方法についてと、良質なデータと悪質なデータを見分ける力を育てる指導体制の整備を今後どのように行うつもりかを伺いたい。

### (学校教育課 森田学力向上指導監)

見学した先行実施校の様子を見ると、子供たちは導入当初こそ戸惑いを見せていたが、新しい形式による読み書きやその評価を経験する中で次第に前向きな姿勢を示すようになった。テストとしての評価だけでなく、表現したこと自体が評価されることが子供たちの自信につながり、学習に対するモチベーションを高めている。加えて、教員が励ましの言葉をかけ、できたことを肯定するフィードバックをこまめに行うことが、子供たちの意欲喚起に大きく寄与していると考えられる。その結果、週に二回行うこの活動を楽しみにする子供も多く、継続的な学びの動機付けが生まれている。

また、現代は多様な情報が溢れているため、子供たちに情報の取捨選択や真偽の見極め方といった情報活用能力を育成する必要がある。教材やデータを選ぶ際に良い情報だけを提示すると、子供たちがそれを「すべて正しい」と誤解してしまう危険があるため、実社会や現実にある事象を取り入れた授業展開で子供たちに触れさせていくことが重要であると考えた。

今後、この学びが社会に出たときに役立つかどうかを確認しつつ、取組を進めていきたい。

#### **(西森委員)**

文章を短く端的にまとめられる人に直接添削してもらい経験を積むことで、言葉に対する感性は大きく磨かれる。そのため、そうした短くまとめられるエキスパートを育てる取組が望ましいと思われる。また、データの取捨選択については、見た目や説明が分かりやすいだけでは正確とは限らない。正しいデータがどのように作られるかというプロセスを理解し、それを見極められる人材を育てることが重要である。

#### **(森田委員)**

学力向上にはスモールステップで進めることが有効であり、同時に一定の学習時間を確保することが重要である。少しずつ確認するためのスモールステップテストを定期的に実施することで、理解の不足を早期に把握でき、身近なところで継続的にチェックすることが可能である。また、授業では最後にまとめと振り返りの時間を設け、当日何を学んだかを確認することが大切である。分かる生徒が分からない生徒に教えることで互いの理解が深まり、教える側も自らの理解の甘さに気付くことがある。

さらに、中学生が高校生や大学生など少し先を行く者と交流することで、将来の具体的なイメージが湧き、学習への意欲や方向性が明確になることが期待できる。最後に、「ことばの力」の教材は教師が選んだものであっても差し支えないが、子供たち自身が興味を持って持ち寄った教材を発表する場を設けることで、どの部分に惹かれたかを要約・発表する機会が生まれ、表現力や思考力の向上につながると考える。

#### **(学校教育課 森田学力向上指導監)**

「ことばの力」シートによって授業へのイメージが広がり、まとめや振り返りだけでなく会話が生まれる使い方を検討することを希望し、授業内で集計して今後の活用方法を検討していく。

#### **(関委員)**

高知市の課題の一つに若者の県外流出がある。高知市は自然や食べ物など暮らしの環境に恵まれているため、教育がしっかり整えば県内で子供を育てたいと考える家庭が増え、結果として人口が増えると考えられる。

情報の取捨選択については、良い情報だけを与えることも有効である。良いものだけを与

えることで人間力が豊かになっていくため、悪いものは後から区別できるようになればよいと考える。

近年は ChatGPT など A I の活用が進んでいる。A I を使いこなせる人材を育てる必要があるはずであるが、現状ではむしろ A I に使われているように見える。A I を多用することで本当に学力が向上するのか疑問に感じる点もある。

添削の話については、添削ができる人材をより多く育てることが重要であると考えます。

### (永野教育長)

高知市の中学校の学力状況を、全国学力学習状況調査などで定点観測し、教育行政として施策を通じて授業を改善していくこととする。高知県では私立進学が根強く、私学への学力形成に対する信頼が世代を超えて続いている。公立校においても教員は尽力しているが、地方という事情から全国水準には届いていないという現状認識が示されている。

これに対して教育委員会は学力向上推進室を設置し、授業改善を中核とした組織的な取組を進める。各校でばらついていた授業をユニバーサルデザイン的な共通モデルへと整備し、授業の質を底上げすることとする。施策の柱は (1) 組織力と教育課程の整備、(2) 学力強化、(3) 「ことばの力」の育成である。「ことばの力」については「ことばの力」シートを活用して文章作成能力の向上を図る。

さらに教育版データ D X の整備を進め、学習データを授業改善に生かす仕組みを構築するとともに、生成 A I などの新技術を授業設計に取り入れて遅れを取らないようにする。最終的には落ち着いた学習環境の整備を通じて着実な学力形成を実現し、まずは数学で全国との差を約 5 ポイント縮めることを目標とする。課題は多いが、授業改善と組織的支援、データ活用、専門家の関与などによって全国水準に近づけることを目指す。

### (桑名市長)

高知市の小学校と中学校を比べたときに全国平均との差が、中学校になると大きく下がるという事実は、子供や保護者にとって非常にショックである。こうした状況を踏まえ、高知市の公立小中学校においては、全国水準を上回る子供たちをさらに励ますと同時に、成績が振るわない子供たちを取り残さないための対策が不可欠である。また、学ぶことの意義を説くだけでなく、「学ぶ楽しさ」をいかに育てるかが重要である。嫌々行う勉強は身に付かない一方で、自ら楽しんで学んだことは長く記憶に残る。したがって、学ぶ楽しさを全面に出して学習意欲を引き出す取組が求められる。

そのような学びを楽しむ環境をつくるためには、教育の現場でどのように構築していくかを考えながら進める必要がある。

## ● 「業務量管理・健康確保措置実施計画」の作成状況について資料に沿って説明

## ●議論

### (永野教育長)

保護者からの過度な苦情や不当な要求により、教員が誰にも相談できず精神的に追い詰められて休職する事例が発生し、その結果として他の教員の負担が増え連鎖的な休職に至ることがあり、深刻な問題となっている。こうした状況を踏まえ、教員不足という現状を鑑み、教員が本来果たすべき職務と教育委員会が提供すべき支援を明確に棲み分け、教育委員会の業務を見直し強化していく必要がある。

### (谷委員)

私は教育現場にいたとき、トイレに行く時間すらないほど多忙であった。それが当たり前になっていることに気付いたとき、大きな問題であると感じた。現在は改善に向かっているが、働き方改革においては教職員のウェルビーイングを重視することが重要であると考えられる。単に残業時間を何時間減らすかといった表面的な対策だけでは不十分であり、職員の人生全体を見据えた大掛かりな仕組みの見直しが求められる。

教職にはやりがいがあり、子供たちが喜んでくれることが何よりの喜びである。しかし、給食費の未納対応や保護者との細かなやり取りのような業務は非常に負担が大きいため、可能であれば別の担い手に分担してもらえると大変助かると考える。ただし、すべてを完全に分業できるわけではないので、ある程度の割り切りと、各学校や保護者の実情に応じた柔軟な対応が必要である。

### (森田委員)

私の職場は教員養成の部署で、学生は初期段階では教師志望が多いものの、進級していくにつれて「民間の方が良いのではないか」といった意見が増えてきている。その背景には、教師は責任が重く休暇を取りにくい、業務が多岐にわたって大変であるため、情熱は持っても長く続けられるか不安に感じる人がいることがある。

したがって、若い人材を増やすには、適切に休める職場やワークライフバランス、あるいは私生活の充実が仕事の質を高めるというワークライフシナジーの考え方が重要である。また、教員からは学校徴収金の徴収・管理が非常に負担であるとの声も聞いている。こうした状況では、誰にとってどの業務が大変で、どの業務がやりがいになっているのかを把握する「見える化」や個別最適化が重要であり、現状でその見える化が進んだことは非常に意義深いことである。

### (西森委員)

【資料3】では、学校以外が担うべき業務という記載があるが、そうではなく、まず冒頭に、教師のコア業務を明確に示す必要がある。コア業務とは「授業の準備と改善」と「子供

たちと向き合うという生徒理解」の二点である。これらを教員が優先して行うべき業務として冒頭に掲げることで、現場が何に注力すべきかが明確になる。

次に、その他の周辺業務については濃淡がある旨を説明する必要がある。そうすることで、結局何をすればよいのか分からないという事態を防ぎ、教員が本質的な業務に集中できる環境を整備することが可能になる。

教員の研鑽については、研鑽は組織が責任を持って提供すべき重要な機会である。法令・判例の学習やパソコン・AIの使い方などの学びは業務の一部として必要であるが、現在は個人任せになっている部分がある。教育委員会は研修機会を体系的かつコンパクトに設計し、可能な限り勤務時間内で受講できるよう配慮することが求められる。さらに、教員が心の余裕を持って学べる職場環境、すなわちワークライフバランスの確保を整備することが必要である。

最後に、施設・設備管理に伴う事故や事後対応の負担を軽減する仕組みの検討が必要である。例えば、プールの蛇口を解放したまま放置したことにより発生した水道料金を教員個人に請求した事例がある。このようなリスクをカバーする保険的な制度や事故後の支援体制を整備し、教員が前向きに業務に取り組める環境を守ることが重要である。

#### **(桑名市長)**

先生自身が心身ともに健全でなければ子供たちを健全に育てることはできないため、皆さんの意見を踏まえ、教育委員会や市長部局を含む組織として改善に取り組んでいく。

#### **●報告事項「小学校における水泳授業の安全管理マニュアル」の改訂について資料に沿って説明**

#### **(西森委員)**

ただ今ご説明いただいた内容をどのように教員に伝えていくのかということが重要だと考える。10分程度の説明動画などを作る予定はあるか。

#### **(学校教育課入江副参事)**

校長会にて私から説明を行い、その後、校長から各教員に伝えていただくということを予定している。

#### **(西森委員)**

動画を作ることはできないか。10分程度の動画であれば、見やすく良いと思う。

#### **(学校教育課入江副参事)**

説明を補助する資料を事務局にて作成しているところなので、動画についても検討する。

#### **(西森委員)**

次に、水泳授業の目的は、子供たちの泳力向上ではなく、水に親しんでもらうこと、また、何かあったときに対処できるようになることが目的だと思うが、どのように伝えていく予定か。

**(学校教育課入江副参事)**

本マニュアルは教職員向けのものであり、子供たちに直接見せることは想定していない。ただし、子供たちに「自分の身は自分で守る」という意識を持たせ、その意識を育成することが重要であり、泳力向上だけが小学校の目的ではないと考える。

なお、今年度は既に複数の学校で、自分の身は自分で守れるようにすることを目的としたウォーターセーフティプログラムを実施しており、まずは子供たちが自分の身を守ることを少しずつ学べるような授業計画を立てている。

**(森田委員)**

マニュアル中のバディシステムの記載部分について、男女が組まなければならないように見えるイラストがあるが、体格や体力が似ていれば同性でも良いと思うので、見え方についても工夫をお願いします。

**(学校教育課入江副参事)**

見せ方、捉え方について引き続き検討する。

**(桑名市長)**

長浜小学校で発生した事故を二度と繰り返さないため、安全管理マニュアルを整備し徹底する必要がある。今回の指摘を受け、教師に対して分かりやすく伝える方法を検討・改善するとともに、実態に即した内容とするため、運用の中で明らかになる新たな課題を踏まえ、継続的にバージョンアップを行う。

本日は議題が二点あり、様々な意見をいただいたことに感謝する。社会はデジタル化やAIの進展により大きく変化しており、これらにはしっかりと投資が必要である。しかし、教育の原点は人と人とのつながりにある。教員が子供一人ひとりと向き合い、子供同士も互いに結びつくことによってこそ、本当の学びが生まれる。その基盤があって初めてデジタル化の恩恵を生かすことができる。このことを忘れず、子供たちと社会のために教育委員会・市長部局として取り組んでいく。